

（帝京大・薬） 木下 武司

【目的】前回の年会で演者は瀉下薬エイジツ（營實）の発生経緯について報告した¹。現行日本薬局方では、エイジツの基原を「ノイバラの偽果又は果実」と規定している。果実とは真正の瘦果のことで、これを営実仁と称し、市場では偽果を玉営実として区別している。瀉下活性成分であるマルチフロリンは営実仁に局在するから、家伝薬では営実仁を配合することが多い。ノイバラの実を薬用とするのは日本独自であるから営実仁・玉営実の区別も日本で発生したと考えるのは自然に見える。しかし、ノイバラの偽果は直径5_{mm}内外であるから、仁すなわち真正果実の部分をわざわざ分別するというのはそれなりの理由があるはずである。演者は営実仁がどういう経緯で発生したのか詳細に考証した結果、一定の治験を得るに至ったので報告する。

【方法・考察】古くはノイバラの偽果を種子と認識していたと思われるが、歴代の和漢本草書にそれを示唆する記述は見当たらなかった。十二世紀初めに成立した宋政府国定医書『聖濟總録』に「糝實」を配合する処方があり、注にヤナギの木で作った臼で磨って中の“黄肉”を篩い取るという、注目すべき記述が見つかった。これはノイバラ偽果から営実仁を取るプロセスに似ており、何らかの関連があると見てさらに詳細に検討してみた。まず、糝實がどう營實と結びつくかであるが、『本草綱目』は「苧實」（各条では苧麻とする）とし、今日ではアオイ科イチビに当てられている。苧實が初見する『新修本草』（苗實としている）以来の歴代本草の記述も矛盾しないので妥当と思われる。すなわち、基原の上から糝實を營實と結びつけるのは困難である。しかしながら、糝實の字体が營實によく似ているので、字義に何らかの関連があれば糝實を營實と誤認される可能性は大いにあり得ると考えねばならない。『説文解字』によれば、糝は熒に通じて「ケイ」と読むが、『康熙字典』や『字通』によれば糝は營と同義とされている。すなわち、音は異なるけれども字義から糝實が營實に通じる可能性があることを示唆する。実際、明代の15世紀初頭に成立した『普濟方』は『聖濟總録』よりこの処方を引用しているが、糝實を營實としている。したがって、営実仁は、本来なら糝實に対する修治を、營實と誤認して適用して発生したと考えることができる。たまたま営実仁にフラボノール配糖体が局在していたため薬効が強くなりこの修治が定着したと思われる。

【文献】¹木下武司、日本生薬学会第57回年会要旨集（徳島、2010年）。